

東京福祉大学総長 中島恒雄総長先生

今後の将来計画 読ませていただきました。先生のお考えにずっと賛同、支持、尊敬 申しあげてきました。たまに事務方の若い人、転勤してきた教員の方々に聞かれたときそのお考えについて説明させていただきました。私も全く同じ考えをもっていたからです。

日本には大学はアカデミックな研究に終始すべき、という暗黙の了解が多くの人々に浸透しています。研究者や学者を目指す人々にはそれは当然ですが、多くの学生たちは学卒後社会へ出て一般人として生活し、家庭を維持、子供を育てていくのです。生活者としての道をまず保証されなければ生きていかれません。私自身貧しい母子家庭に育ち、普通程度の成績でやっと大学を卒業してきました。かえり見ますと、教員試験、東京都公務員試験、公認心理士試験など種々の試験に受かってやっと社会にうけいれられてきた、という思いがあります。その間ほとんど自力の戦いでした。もし試験に対しての取り組み方など指導してもらえたらどんなに自信が持てたか、とおもいます。社会へ出てから私は自分の本命であったアカデミックな仕事への努力をはじめました。幸いのことに博士マル号をとれ、学会発表もたくさんしました。一時期国際的な知人もでき期待もされました。学術図書 5 冊出版もできました。これらは社会にでて実践して得た経験を学術的にまとめることができたからです。まずは社会に受け入れられ、生活の基盤を築くことができたからです。もちろん大学の支援があったからです。

学問的には、心理学を通して生きにくい学生、社会人への支援を続けたい、という目標があります。生涯の目標であり、社会貢献への私なりの道筋ですがこれを得られたことにより私自身人生に迷うことはありません。

総長先生が「できない子」へ注目された背景に「人」に対する「愛」と脳を効果的につかう優れた技能をみてきました。さらに心理学的な配慮も随所に発見できます。アメリカの先進的な人間観、世界観があるのでしょうか。

それらを基盤に大学を創っていくことにお役にたてるのが私にもあるか、考えようとおもいます。

先生のご健康いのりあげております。

令和3年9月8日 原千恵子